



ひろびろたより

No.5 2018. 7.25

今年度の「ひろび陶芸の旅」が終了しました。たくさんのお園生ご家族、在園生ご家族と、南信は泰阜村にある「グリーンウッド自然体験教育センター(通称 暮らしの学校 だいだらぼっち)」へ行って来ました。私たちに陶芸も教えてくださる大越 慶さん(ギック)と葉子さん(まるちゃん)がそこに工房と、窯を構っております。

「暮らしの学校 だいだらぼっち」は、全国から集まった小中学生が泰阜村に移り住み、村の学校に通いながら協働生活をしている。暮らしの全てを話し合いで決め、毎日のご飯づくりや、掃除・洗濯・薪割り・田んぼ・畑も子どもたちがあそんでいる。地域・自然との関わり・食べる事・働く事・遊ぶ事・感じる事・創ること・他者・自分自身のあり方……など「毎日の暮らし」の中で学びの原点があると考え、実践しているのです。

「一年間のキャンプがしたい。そうしたら食べ物も自分たちで作りたい。食器や家だって作れるかもしたい。」……という子どもたちの言葉から始まったのが「暮らしの学校 だいだらぼっち」です。30年以上前のことです。「自分たちの力で暮らし」を合言葉に集まったのは、4人の子どもと3人の大人。「夢を形にするために、知恵を出し合い、チャレンジと失敗をくり返しから始まった。その暮らし……。3人の大人の一人がギックです。武蔵野美術大学を卒業し、ひんたことからだいだらぼっち創設に関わり、同じ大学の後輩だったまるちゃんを奥さんにして住み始めました。ギックは、「ものづくり」を大切にしながら子どもたちに関わってきました。

お家の4番目の子ども(長男)がだいだらぼっち創設。10年目から3年間でだいだらぼっちにお世話になりました。村内唯一の泰阜村立中学校に通いました。木の電柱や枕木、廃校校舎の窓枠、間伐材などを使って、自分たちで建てた最初の母屋時代でした。おま風が入る中、保護者の方々と、だるまストーブを囲み、朝まで飲み語り。手作りの五右衛門風呂に入りました。親の集まりは、東京でも…名古屋でも…と広がっていき、今でも子ども

たち抜きで集まりは続いています。息子の結婚式には、だいだらぼっちスタッフや泰阜中学校の友人たちが出席して下さい。息子は、今でも何かがあると「だいだらぼっちに行って報告してくる」と出かけて行きます。複数の「実家」があることは幸せなことだと思います。親としても誰かが見守ってくれていると思うと安心した気持ちになります。そして、私たちの子どもだけじゃなく、たくさんの方とみんなの子どもが一緒に暮らすことは、何と安心な気持ちでいられるでしょう。

息子が3年間住んでいる間に、彼の陶芸作品が増えました。中でも、毎年の母の日にもらった大玉おツボ 三つは、私の宝物です。一つは傘立て、一つはドラムフラワーを入れた、一つは折り紙のものをに入れてあります。

ひろびは「買うよりも創り出す」を初期の頃から大切にしています。「毎日の焚き火で何か創りたいだろうか」とギックに相談したのが2008年。そして「自分の笛を焼きまらう」と実現したのが2009年3月。私が今でもその笛を避難訓練の時に吹くと、毎回、子どもたちが「いいよ、その笛!」と言って吹きたがります。私もいつかみんなの笛作りをしてみたいと思います。

楽しかった笛作りの続きをしようと、2009年夏に、ひろびの皆さんとだいだらぼっちへ出かけて行きました。それから年一回のひろび陶芸の旅は続いています。今年は10回目の記念旅でした。ギックとまるちゃんは、「子どもたちが生き生きと自由に作れるように、制限を設けずに存分に粘土と格闘できるように工夫してくださっています。」

小さな子どもたちが創り出す「初めて」の作品は、おもしろいです。箸置きもカップもお茶碗も…お見直しからこの楽しい作品です。今年は、中3生が4人おられ、「去年作ったぼくのラーメンを羨ましがっているお父さんのラーメン」、「複雑な形のお香立て」、「組み合わせて使う写真立て(?)」、「かける所1つおきのオーブントースター何年か〜創り続けてきたから、このアイデアと実力、大人も同じで「また創りたい」、「作品を増やしたい」気持ちがふくらみ、「また今年も」と、参加人数が毎年増えていきます。

私も10回の作品があるけれど、一番の大作は、「私自身の骨つぼ」。ひろびのマークの小鳥が蓋の上にツマミとして付いています。釉薬は、南信特産のりんごで美しいカラーグレーに染めました。だいだらぼっちの田んぼのワラを釉薬にした、深めの煮も

